

解説

宮下 遼

「鹿とお母さんとドイツ」は、トルコ共和国の閨秀作家ヌルセル・ドウルエル（一九四一）が一九七九年に発表した処女短編である。作者はイスタンブル大学文学部考古学科を卒業後、トルコ国営放送に勤務し八五年に退局、以降もイスタンブルのラジオ局、テレビ局でプロデューサーとして数々の文芸・文学番組を手掛けた経歴を持つ。これまでに上梓したのは短編集二点のみという寡作な人だけれど、その評価は頗る高い。トルコ小説によく見られる子供の独白叙法を用いながら、ドイツへ出稼ぎに行った父の面倒を見るため、明日に旅立ちを控えた母を見守る幼い娘の心境が語られた本作は、アカデミ書店短編集小説賞（一九八一年）、サイト・フアイク物語賞（一九八三年）に輝き——ちなみにドイツ語訳は彼の地の教科書に載ったことがあるのだそうだ——第二短編集もユヌス・ナデイ短編集小説賞を受賞しているからだ。

一九六〇年代にトルコは西ドイツと雇用双務協定を締結、国内の農村出身の失業者たちはこ

ぞって渡独し、トルコ人がドイツ者 (Aلمان)、在独トルコ人) と呼んだ彼らの数は、七四年に一〇〇万人を突破、現在ではドイツ最大の移民社会を築くに至っている。畢竟、トルコ小説にはドイツを扱う作品が多い。例えば一二年間のドイツ生活とその孤独と葛藤を飼猫の視点から描いた閨秀作家オヤ・バイダルの『猫の手紙』（一九九二年）はいまや不朽の名作となりつつある。ドイツでも九〇年代くらいからエツダマーやザイモグルのようなトルコ系ドイツ人作家が登場し、平行社会を生きる故郷喪失者としてのドイツ者アイデンティティを武器に旺盛な活動を見せてもいる。

ただし、トルコ小説ではその二十年も前から、すでにドイツが描かれていた。そもそもトルコ文壇では、一九五〇年から八〇年までの凡そ三〇年間、農村、のちには都市に流入した農民たちの貧困を主題とするプロレタリア的な農村小説というジャンルが主流を為していた。ドイツ者が扱われたのもこの文脈だ。例えば、代表的な農村作家で、長年ドイツで亡命生活を送ったファキル・バイクルト（一九二九—一九九）のデュースブルク三部作などが有名で、まさに本作で「子供たちの将来を良くしようって働いているんだって」と語られるドイツ者たちの努力と挫折、貧困の痛切さが主題とされた。トルコ文学におけるドイツは、長らく貧困と差別と

の戦いの「前線」を象徴していたわけである。

しかし、本作の主題は貧困と挫折の「前線」ではない。確かに劇中の家族解体は貧困に起因するけれど、ドイツも貧困も、主人公の少女にとつては必ずしも実感を伴わない存在だ。さらに言えば、本作が発表されたのは八〇年のクーデター後、読者たちはプロレタリア的な政治小説に食傷気味で——だからこそオルハン・パムクを筆頭に現在のトルコを牽引する作家たちが世に出る機会に恵まれた——農村小説が一挙に下火になった時期である。こうした文壇の動向を踏まえれば、作中で異郷ドイツも父／ドイツ者も、白眉となる春先の絨毯の洗濯という牧歌的な記憶の愉楽と、母と父への思慕に挟まれてことさらに想像上の存在のごとくに背景に霞んでいることにある程度、納得がいくと思う。ドウルエルの視線はあくまで、それまで専ら男の欲望と思想の窓辺から眺められていたドイツ「前線」を冷めた目で見やる「銃後」の女たちの心情に定められているのだ。

「涙と戦わないと。大きくなるために、幸せな夢を本当にするために」——在りし日の理想を体現する絨毯の鹿に思い馳せながら独白して、涙をおねしょへ転換し、でもおねしょ娘とも思われたくないという少女の強がりが終わる終幕には清々しい開き直りと、前向きさがたゆたっていて愛おしい。